

子どものための奴隷制廃止運動

雑誌『奴隷の友だち』の分析を中心に

宮井 勢都子

要 旨

本稿は、アメリカ奴隷制反対協会によって発行された子ども向けの雑誌『奴隷の友だち』に焦点を当て、この雑誌が奴隷制や人種の問題を子どもたちにどのように語ったのか分析することを目的としている。そうすることによってアボリショニストが奴隷制や人種をどのように理解し、また19世紀半ばの社会変化の中でどのような資質を身につけた人間になることを次世代に伝えたのか考察する。『奴隷の友だち』は奴隷制反対の啓蒙の場であったとともに、この時代に確立しつつあった中産階級的な価値や美的感性、生活の仕方を定義し、「白人」としてのアイデンティティを形成する教育の場でもあった。

はじめに

1830年代はじめ、アメリカ合衆国の北部で起こった奴隷制廃止運動は、奴隷制の即時全面廃止を主張して、奴隷制を擁する南部だけでなく北部社会にも大きな衝撃を与えた。従来の奴隷制廃止運動に関する研究は、この運動をおもに成人が主体であり対象である運動としてとらえてきた。しかし、アボリショニスト（奴隷制廃止運動家）は、早い時期から運動の対象として、また運動の主体として子どもたちを積極的に運動に取り込んでいた。奴隷制廃止運動誕生の契機ともみなされている W. L. ギャリソンの『リベレーター (*the Liberator*)』紙（1831年1月1日創刊）には、ごく初期から「子ども欄 (Juvenile Department)」が設けられ、奴隷制の問題に関わる子ども向けの説話や物語が掲載された。1835年から38年にかけては、奴隷制廃止運動の全国組織（1833年設立）であるアメリカ奴隷制反対協会 (American Anti-Slavery Society) によって、子どものための月刊雑誌『奴隷の友だち (*the Slave's Friend*)』(1835年～38年) が発行されている。

アボリショニストによる子ども向けの文書は、これまでの奴隷制廃止運動研究において一部の研究で言及されることはあっても、史料として分析の対象になることはほとんどなかった。また児童文学の分野においても、これまで社会運動の子ども向け文書は文学作品としては対象になりにくかった。近年になって、女性史やジェンダー論、家族史研究の興隆を経て、ようやく子ども向け文書の歴史的意義に光が当てられつつある。『奴隷の友だち』はジェンダーと人種との関わりに関する研究分野において近年「(再)発見」されたといっていよい⁽¹⁾。

この雑誌が発行された19世紀前半は、産業化が進み中産家庭の子どもの労働力としての役割が低下する中で、子ども時代を注意深いしつけと現実の世界からの庇護が必要な特別な時期とみなす子ども観が一般化した。さらに1820年代のアメリカで高まった第二次信仰覚醒の影響を受け、神学的にも、

子どもを生まれながらにして罪深いとする見方が薄れ、子どもの「純粹無垢」な側面を強調する傾向が強まった。その「純粹さ」にはまわりの人びとを変える潜在力があるとみなされ、だからこそ「子ども時代」にどのような人格を植え付けるかはアメリカ合衆国の未来を左右する重要な課題と考えられた。

こうした子ども観の変化を背景に、この時代に子ども専用の雑誌や読み物が数多く登場するようになる。子ども史研究者のアン・マクロードは、19世紀前半の児童文学の発展の背後に、建国後間もないアメリカ合衆国をどのような国に立ち上げていくかという考えに「とりつかれた」アメリカ人の強い衝動があったとし、「1820年から1860年の間に合衆国で出版された何百もの〔子ども向けの〕読み物には、大人が次の世代に対して、また次の世代のために何を望んでいたかが記録されている」と述べている。この時代に子どものための読み物を書くことは、娯楽の提供が主たる目的ではなく、むしろ子どもを「教えるため、とりわけ道徳を教えるため」の教育的行為であった⁽²⁾。

アポリショニストは、19世紀前半に広まったこうした子ども観を共有していた。アメリカ奴隷制反対協会によって子どものための専任教師に任命されたヘンリー・C・ライトは、ギャリソンに宛てて「もし、この世界を再生させ救済しようとするなら、我々の努力を子どもたちに向けなければなりません。幼児期（*infancy*）そして子ども期（*childhood*）の間に、罪の型にはまり適合する前に、その心に神の真理をもたらしすべきです」と記し、「子どもたちからまず始め、正しく感じ行動することが習慣になるように、子どもたちの心を訓練することが大切です。そうすれば大きな成功を望むことができるでしょう」と主張している⁽³⁾。

しかし、19世紀前半に広まった子ども観を共有していたアポリショニストは、現実の世界から庇護されるべき子どもたちに奴隷制の苛酷さを語ったという点で、当時の社会においては特殊だった。当時のアメリカの子ども向け読み物の中には、貧しい人々への慈善や禁酒など、社会改革に関わるテーマがしばしば語られていた。しかし、1830年代の社会において、子どもの読み物の中で奴隷制の是非をテーマに扱うことはタブーに近かった。例えば、当時最も人気の高かった女流作家の一人、リディア・マリア・チャイルドは、子ども雑誌『児童選集（*Juvenile Miscellany*）』の編集者としても知られていたが、彼女が即時廃止主義の姿勢を公にすると、読者の親から講読取り消しが相次ぎ、1834年には、この子ども向け雑誌はついに廃刊に追い込まれた⁽⁴⁾。『奴隷の友だち』が発行された1830年代後半は、奴隷制廃止運動に対する反撃がもっとも激化した時代である。アポリショニストに対する集会妨害や暴行、いやがらせが頻発し、1837年には奴隷制廃止運動の新聞発行者、E・ラブジョイが殺害されるという事件も起きている。このような時代状況の中でアポリショニストは子どもたちに向けて奴隷制問題を語ったのである。

本稿は、この『奴隷の友だち』に焦点を当て、アポリショニストが子どもたちに向けて何を語ったのかを分析する。アポリショニストがどのような資質を備えた人間を「自由」な市民と考えたのか、そしてそのことがアポリショニストの奴隷解放の展望にどのように関わるのかを明らかにすることは今後の課題であるが、その手がかりとして本稿では、『奴隷の友だち』の中で奴隷制や人種の問題がどのように語られたのか、また、この雑誌の中の読み物が次世代を担う子どもたちにどのような行動

をとることを期待し、どのような人間になることを説いたのかを見ていきたい⁽⁵⁾。

1 『奴隷の友だち』の発行

1835年5月、アメリカ奴隷制反対協会の第2回年次大会の席上、ルイス・タッパンは、奴隷制問題を問うた文書を大量に出版して全国的に配布・郵送する運動の展開を提唱し、そのための予算として3万ドルを計上した。タッパンは協会の評議会の一員であり、またニューヨークの富裕な絹製品の商人としても名高かった。タッパンの提唱を受けて、協会本部が置かれたニューヨークのアボリショニストが中心になり、協会は4種類の雑誌を発行した。『奴隷の友だち』は、その一つとして誕生する⁽⁶⁾。1830年代の廃止運動は、「道徳的説得 (moral suasion)」を運動の主要な戦術とみなした。奴隷所有者の良心に訴えると同時に、奴隷制を自分たちには関わりのない問題と考える北部の人びとを啓蒙し、奴隷制反対の世論を作り出そうとしたのである。アボリショニストにとって、出版活動は「国中に奴隷制廃止の良き種を蒔くため」の「道徳的説得」の重要な手段だった⁽⁷⁾。

『奴隷の友だち』は、縦約11.5センチメートル横約7センチメートルで、子どもの手に収まる小さな雑誌である。およそ20ページの紙面にはたくさんの木版のさし絵が印刷され、物語、奴隷の体験談、詩、旅行記の他、聖書からの引用や教理問答、読者からの投書などが掲載されている。ほとんどの記事が匿名で筆者を特定することは難しいが、リディア・マリア・チャイルドやエリザ・フォーレンなど、当時人気のあった女流作家の物語や詩の掲載もいくつか確認することができる⁽⁸⁾。

この雑誌は月に一回発行され、1838年に第4巻2号で廃刊になるまでに全4巻38号の発行を見た。価格は一冊1セントで、これはこの時代の印刷機の技術革新が生み出した、いわゆる「1ペニー・マガジン」と呼ばれる印刷物の一つだった。『奴隷の友だち』が発行された1835年、蒸気を動力とした印刷機の導入によって印刷コストが激減し、しかも一時間あたりの印刷枚数が従来⁽⁹⁾の10倍以上になった。この年アメリカ奴隷制反対協会が発行した印刷物は前年の9倍に上り、『奴隷の友だち』をはじめとする出版物を廉価でまたは無料で大量に配布・郵送する運動が可能になったのである⁽⁹⁾。

1冊1セントの『奴隷の友だち』は、100冊購入すると80セント、1000冊では6ドル50セントに割り引かれ、廉価で販売されただけでなく、無料配付も広く行われた⁽¹⁰⁾。このことは、奴隷制を擁する南部だけではなく奴隷制問題をきわめて「政治的」問題と考える北部人の間でも激しい反発を呼び起こした。協会が南部への文書郵送運動を始めて一ヶ月後の1835年7月29日、サウスカロライナ州のチャールストンでは市民が郵便局を襲撃し、北部から郵送された印刷物を焼却する事件が起きている。焼却された郵便物の中には『奴隷の友だち』も含まれていた。北部においても、奴隷制問題を子どもに語る『奴隷の友だち』の登場を危機感をもって語る声は少なくなかった⁽¹¹⁾。

この雑誌の編集に関わったルイス・タッパンは、第1巻2号のあとがきで次のように記している。

『奴隷の友だち』は子どもたちのために印刷されています。編集者は[子どもたちに]気の毒な奴隷たちのことを愛してもらいたいのです。彼[編集者]は、この小さな本を小さな子どもにも分かるように書こうと心がけています。

また第1巻6号冒頭の読者へのメッセージでタッパンは、この雑誌が「単に楽しむために書かれた

のではない」ことを読者に説いている。この雑誌の出版の目的は「あなたたちが知らなければならぬ多くのことを教えるため」であり、ゆえに「これを注意深く読み通し、読みながら考えてほしいと思っています」と述べている。そして「物語をあなたたちの記憶にとどめ、決して忘れないようにして下さい。神がこれらの物語をあなた方の心に刻みつけて、あなた方がそれらをいつも心で感じることができますように」と訴えた。

それでは、こうして子どもたちに語られた物語の中で、奴隷制はどのようなものとして描かれたのだろうか。

2 奴隷制とは

(1) 家庭と子どもへの脅威として

雑誌の中で、奴隷制は奴隷の家族や親子の絆を破壊するものとして描かれている。奴隷制の暴力的な側面は、奴隷制が母親や子どもたちに及ぼす悲惨な影響を扇情的に描くことによって強調されている。腕に抱いた赤ん坊の重さのために一行から遅れてしまった女奴隷に腹を立てた奴隷商人が、赤ん坊を取り上げて通行人に渡してしまったできごと（「哀れな無垢な者たち (the Poor Innocents)」）、売られていく幼い我が子に半狂乱になって追いつがる母親を奴隷監督が引きずり離し、むち打つ光景を生々しく記す「チャールズ・ボールドの母」など、子どもから引き離され悲嘆にくれる奴隷の母親の姿が繰り返し語られる。「哀れな無垢な者たち」の作者は、子どもたちを全焼の生贄に捧げる人びとに対し神の警告を告げた旧約聖書エレミヤ書（19：4）「この所を罪のないもの血で満たし」という言葉を引用し、「わたしたちが悔い改めることがなければ、神はアメリカを罰するのではないでしようか」と訴える¹²⁾。

奴隷制は、アメリカだけではなくアフリカにおいても家庭の幸福や安定を破滅させるものとして語られる。家族の離別や家庭の崩壊は、母親の深い悲嘆を引き起こすとともに、子どもたちの生活に深い影響を与える脅威としても記されている。家を離れて無心に遊んでいたアフリカ人の姉妹は、さらわれて奴隷船に乗せられ、二度と両親に会うことができない（「盗まれた子どもたち」）。『奴隷の友だち』には、奴隷船上でむち打たれる兄の返り血を浴びる妹や（「哀れな母親」）、奴隷船上で命を落とした姉を追って海に身投げする弟（「ザモールとヒンダ」）、さらには奴隷貿易の途中に一部の奴隷が海に投げ捨てられる中間航路の悲惨さも子どもたちに知らせている。そして「奴隷たちは家畜と同じでこのようなことを気にしてはいないという人びともいますが、そんなことはあり得ません」と訴えた（「奴隷貿易について」）¹³⁾。

読者である子どもたちにとって、奴隷制は「私のような年頃の子どもたちが、お母さんのもとから引き離され、愛する親しい人たちのいる家庭から引き離されて、」「お父さんにもお母さんにも二度と会えずにこの大きな広い世界の中たった一人」遠く知らない場所で生きていかなければならない恐ろしい制度である（「あり得ること？」）¹⁴⁾。奴隷制は奴隷の家庭を破壊し、そうすることによって保護されるべき無垢な時期としての子ども時代を脅かすものでもある。

誘拐も、しばしば登場するテーマである。黒人の子どもたちは、例え自由黒人の子どもであって

も、いつ誘拐されて南部に奴隷として売られるか分からない。第1巻9号に掲載された「メアリー・フレンチとスーザン・イーストン」は、もともとはリディア・マリア・チャイルドが1834年に雑誌『児童選集』のために書いた作品で、ミシシッピ川西岸の開拓地に暮らす白人少女メアリーと自由黒人のスーザンについての物語である。二人の少女は、開拓地で遊んでいる間に白人の男に誘拐される。この物語の中で、男はメアリーの白い肌を煤とグリースで黒くし、また髪を短く縮れさせてプランテーションに売り飛ばす。涙によって白い肌が現れたメアリーはからくも両親の元に戻るができるが、別々に売られた黒人少女スーザンの行方は分からない¹⁵⁾。この物語は、黒人だけではなく白人の子どもたちでさえも奴隷制の影響の下で安全ではないことを警告し、身近な脅威として読者に奴隷制を感じさせている。

(2) 人間を道徳的暗闇に閉じこめる制度として

身体に加えられる暴力や家族の別離と同じくらい、またはそれ以上に残酷な奴隷制の影響として『奴隷の友だち』が問題にしているのは、保護され正しく導かれるべき子ども期にある奴隷の子どもたちが、親に世話をしてもらうこともできず、また教育も受けられずに物理的にも道徳的にも「放置」された状態におかれていることだった。奴隷の子どもたちが、「ほとんど裸」で、空腹であり、何の知識も教えられることが無く、寝るときには「犬か豚のように」身を寄せ合って床の上で寝ていると『奴隷の友だち』は繰り返し読者に伝えている¹⁶⁾。

アポリショニストたちは、奴隷の子どもたちの放置状態の中でも、とくに奴隷に対する教育が禁じられていることを問題視した。「かわいそうな小さな女の子」(第3巻6号)は、食べ物も与えられず、また、むち打たれて傷だらけになって逃げ出した奴隷の少女が親切な白人の家族に保護されたことを紹介し、「子どもたちがこんなにも苦しんでいるのを目の当たりにすることに恐怖を感じます」と述べている。しかしそれ以上に「彼ら[子どもたち]を奴隷制の中にとどめ、読み書きを学ばせずに、真の神を知らない者(heathen)として彼らを成長させることほど残酷なことがあるでしょうか」と問うている。第3巻2号に掲載された「耳の聞こえない子、口の利けない子、目の見えない子」の筆者も、奴隷の子どもたちは「目が見え、耳が聞こえ、指もあります。もし、そうすることが許されているなら、彼らだってあなたたちと同じくらい素早く読んだり書いたりできるようになるでしょう。しかし、読んだり書いたりすることを彼らに教えるのは奴隷州では法律違反なのです」と述べ、「奴隷所有者たちは彼ら[奴隷の子どもたち]の精神を暗闇の中にとどめおこうとしているのです」と批判している¹⁷⁾。

1829年から1834年にかけて、南部諸州は奴隷に読み書きを教えることを禁じる法律を次々に成立させた¹⁸⁾。アポリショニストにとって、読み書き能力は、単なる知的学習や学ぶ喜びを得るための手段ではなかった。読み書きは「知識の鍵」であり、とりわけ聖書の知識を得るための「鍵」だった¹⁹⁾。これはまた、人間を「動物」と異なった存在にし道徳的に向上させる道を開くものでもあった。それゆえに、読み書きを学ぶことを禁ずることは、聖書を読む機会を奴隷から奪い、奴隷たちの「精神を暗闇に閉じこめたまま」にすることと、アポリショニストは主張したのである。「神は彼らを読むこ

とを学び、そして聖書を読むようにと意図しておられます。しかし奴隷所有者はこれに対して否というのです⁽²⁰⁾。

産業化や都市化が進む19世紀前半のアメリカにおいて、大衆への読み書き教育の普及は政治的社会的安定や経済的発展の要として社会改革者に重視されるようになる。読み書き能力に関する歴史研究者ハーヴェイ・J・グラフは、読み書き能力は「道徳に根ざしたものとして、また変動の時代における社会的安定の手段として」考えられたと論じている。グラフは19世紀の読み書き教育熱の背後には、すべての人びとを神の言葉である聖書に導きたいというプロテスタント特有の衝動があったと分析する⁽²¹⁾。プロテスタント社会においては、聖書を自ら「読む」能力は、個人の魂の救いに関わる重要な意味を持っていた。読み書き能力は、個人が福音に触れキリスト者になるための前提であり、また道徳的達成の象徴ともなった。それゆえにアボリショニストは、読み書きを教えることを禁じた奴隷制を、人間を道徳的暗闇に閉じこめ、そうすることによって人間の自己向上の機会を奪う制度とみなしたのである。

『奴隷の友だち』は「聖書を読むことのできないアメリカにいるかわいそうな何十万人もの奴隷の子どもたち」は「家畜と同様に無知なままの状態におかれているのです⁽²²⁾と訴え、「かれらはキリスト教の国にいながら神を知らない者なのです⁽²³⁾と述べている。そして、このような奴隷の子どもたちは「罪を犯してはならないことを教えてくれる人もおらず、大いなる神、イエス・キリストについて何も知らずに、二重の意味で奴隷です。その身体と精神の両方ともが奴隷の状態にあるからです。ああ、奴隷制に身体を拘束されることは残酷なことです。しかし、もっと残酷なのは奴隷制に精神を拘束されることです⁽²⁴⁾と主張した。

奴隷の捕獲、奴隷売買、奴隷所有は、『奴隷の友だち』の中で「盗み」の罪とみなされ、奴隷商人や奴隷所有者はしばしば「人間泥棒 (men-stealer)」として語られる。第1巻2号の「どのようにして子どもたちは奴隷になるのか」という読み物の中で、「そもそも彼らは盗まれたのです」と教える母親に対し、「ピン一本でも盗むことはとっても悪いことと思っていたけど、子どもたちを盗むだって？」と驚く少年ジョンの反応は読者も共有するものだったろう⁽²⁵⁾。しかし、奴隷制は、人間の身体を所有し人間を売買し黒人の家庭を破壊する外的破壊力のゆえに罪であるだけでなく、奴隷に聖書を読む手段となる読み書きを禁じ奴隷の自己向上の機会を奪うことによっても神に背く行為である、とアボリショニストは認識していた。

この奴隷制の「罪」を奴隷所有者に自覚させ、「あとで」でも「そのうちに」でもなく「今すぐ」、罪の悔い改めと自発的な奴隷解放の決断を求めることが、「即時廃止主義」のめざすことだった⁽²⁶⁾。

3 子どもたちに何ができるか

(1) 心に感じること：奴隷制理解と「白人」としての自己理解

1837年にニューヨークにおいて開催された「アメリカ女性の奴隷制反対大会 (The Anti-Slavery Convention of American Women)」は、子どもたちに向けてメッセージを発表し、これは、『奴隷の友だち』第3巻2号に掲載された。「あなた方の多くが奴隷たちに同情し、彼らのために何かをしよう

としていることを聞いて嬉しく思っています。子どもには奴隷制のことは良く理解できないし、奴隷制を終わらせるために子どもたちができることもないと、かつて多くの人が思っていましたし、そのように考える人びとは今でもいます。」しかし、「子どもたちが奴隷制について学び、語り、行動するならば、奴隷制は終わりを迎えます。」女性アボリショニストたちは、「子どもたちには周りの人びとに影響を及ぼす力があるのです」と述べ、子どもたちには社会変革の主体となるよう励ました⁽²⁷⁾。

子どもたちにできることとして、まず、奴隷の体験を内面化し追体験することが重視された。「奴隷制について学ぶようにしましょう。この問題について学べば学ぶほど心に感じるようになります。そして、そのことについて感じれば感じるほど、あなたは役に立つ人になるのです。」⁽²⁸⁾頭で理解するだけではなく、心で感じることを重視するこの見方は、感情や感受性を重んじたこの時代の信仰復興運動やロマン主義の思想に通じるものである。

家族の別れ、むち打たれ血が流れる背中、取り残される子ども、奴隷船上の悲惨さを感情的・感傷的な口調で描いた読み物や、その様子を詳細に描いた木版画のさし絵は、読者の恐怖心や不安を刺激し、強い印象を読者に残すものだった。また「あなたの弟が六か月の赤ちゃんだったときのことを覚えていませんか。どんな風にお母さんの腕の中に抱かれていたか覚えていませんか。その腕の中の弟がお母さんから引き離されて、奴隷として売られると考えてみてください」と畳みかけるように子どもたちに訴える口調は、奴隷の子どもと同じ状況に読者を置き、読者の感情に訴え、その苦しみや悲しみを自分のものとして感じさせようとするものだった⁽²⁹⁾。前述したように、ルイス・タッパンは読者へのメッセージとして、「注意深く最後まで読み通し、また、読みながら考える」ことを子どもたちに求め、「これらの物語を決して忘れないようにあなたがたの記憶にとどめなさい。神がこれらのことをあなたがたの心に刻みつけ、あなたがたがそれらをいつも心で感じることができますように（傍点は原文ではイタリック）」⁽³⁰⁾と語った。肌の色にかかわらず奴隷にも同じ人間の感情があること、それゆえに奴隷制の中で奴隷の苦しみは大きいことに気づかせ、その苦しみを自分の心で感じることを子どもたちにまず求めたのである。

奴隷の苦しみを自分のものとして感じることは、人種の境界を超えて奴隷の立場に身を置くことである。『奴隷の友だち』は、北部の白人の子どもたちに黒人の立場に立って物事を感じることを勧め、自分の中に存在する偏見を問い、黒人の子どもたちを白人の子どもたちと同様に扱うよう説いた。黒人を「ニグロ」と呼んだり、黒人の成人男性を「ボーイ」と呼ぶことを戒め、黒人に対して、「常に尊敬と親切な感情を持って」接するよう忠告した⁽³¹⁾。

『奴隷の友だち』は黒人の子どもたちが書いた作文や手紙を掲載し、「もし黒人が白人と同様に有利な環境にありさえすれば、黒人も白人と同等になる」と主張した。黒人は発生の起源においても、その資質においても生まれながらにして白人とは異なることを「科学的」に論じる人種観が広まりつつあった時代であって、アボリショニストはあくまでも黒人と白人の違いは環境によって決定されたものであるとする見方に立っていた。神は、白い肌の人間の方が黒人より罪がなく優れているという見方はされないと主張し、「神は肌の色ではなくその行いを見るのです」と、警告した⁽³²⁾。

『奴隷の友だち』の読者にとって、奴隷の状態について知り人種の境界を超えて相手の思いを感じ

ることは、同時に、今まで意識したこともなかった人種の境界線の存在を知ることでもあった。奴隷の子どもたちが石の炉床に「豚のように」兄弟が身を寄せ合って寝るような生活をし、「裸で、ひもじい思いをしており、無学で、むち打たれ」ていることを『奴隷の友だち』の中の読み物を通して知ることが、自分たちとは生活も体験も異質な「かわいそうな」「他者」として奴隷の子どもたちのイメージを得ることにもなる³³⁾。ここで注意しなければならないことは、奴隷制の悲惨さを伝えるこれらの物語は、奴隷制の正確な描写であるよりは、アポリシヨニストがどのように奴隷制を理解し、奴隷制の中にある黒人の子どもたちをどのようなイメージで捉えていたかを反映しているということである。

奴隷の子どもたちの悲惨さを伝える物語の作者は、奴隷の境遇とは対照的に、読者には素敵なベッドや温かいベッドカバーがあることを思い出させる。そして、だからこそ「あなたが奴隷に生まれなかったことを感謝しなさい。黒人の子どもに親切にしなさい。奴隷制を終わらせるためにできるすべてのことをしなさい」と説いている³⁴⁾。悲惨な境遇の中で「家畜」「動物」のように暮らしている奴隷の子どもたちの体験を鏡として、これらの読み物は読者に恵まれた境遇にある子どもとしての自己に気づかせる。

読者は、読み物に描写される奴隷との対比の中で自分たちの境遇が恵まれているのは自らの肌の色が白いことと関わりがあることに気づかされる。「どのようにして子どもたちは奴隷になるのか」(第1巻2号)において、ジョンは『奴隷の友だち』にでてくる子どもたちはどうして奴隷なのかと母親にたずねている。肌の色が黒いためと答える母親に対して、ジョンは「ぼくの肌の色は何色なの」と問う。その問いに母親はジョンのような肌の色は「白と呼ばれている」ことを教える³⁵⁾。読者は、奴隷の物語に自らを映すことによって、自分たちを「彼ら」のようではない白人としてのアイデンティティを形成し、アメリカにおいては肌の色の違いによって子どもたちの境遇が大きく異なることを発見するのである。

『奴隷の友だち』を通し、読者は奴隷制について学ぶと同時に、自分が「白人」であること、そして、「白人」であるがゆえに奴隷の運命に対する道徳的責任を共有していることも知らされる。「私は自分が白人であることに、顔が赤らむ思いがした。黒人に対してこんなにも残酷なのは白人なのだから。」³⁶⁾

(2) 子どもの奴隷制廃止運動の組織化

奴隷制を終わらせるために子どもたちは具体的に何ができるのか、奴隷制について読み「感じ」たことをどう行動に移すかという問いは、『奴隷の友だち』にしばしば現れる。こうした問の答えとして、「私たちに何ができるか？」(第1巻3号)では、ロードアイランド州プロヴィデンスの少女たちの集まりの様子を紹介している。少女たちは週に一回集まり、絹やベルベットの端切れからピンククッションや小物入れ、ビーズ細工を作り、その売上金を大人たちの奴隷制反対協会に寄付することを集まりの目標にしていた。他の少女たちが縫い物をしている間、一人が読み聞かせの係になり、『奴隷の友だち』やアメリカ奴隷制反対協会の機関誌『奴隷制反対の記録 *Anti-Slavery Record*』を朗読する

様子がこの記事からは伺える。こうして、少女たちは集会の中で手芸をしながら奴隷制について学び、また自分たちが作った品を運動資金作りにつなげたのである³⁷⁾。

1836年8月14日、14歳以下の少年少女が、ニューヨーク市のチャタム・ストリート・チャペル (Chatham Street Chapel) の会堂に集まり、「子ども奴隷制反対協会 (Juvenile Anti-Slavery Society)」を結成した。その様子が『奴隷の友だち』第2巻5号に特集されている。この子ども組織は、年会費として1セントを納めた14歳以下の子どもを会員とし、成人の組織であるニューヨーク市奴隷制反対協会の支部組織と位置づけられた³⁸⁾。

この子ども組織結成の場で、アメリカ奴隷制反対協会の執事の一人、ルイス・タッパンは、「子どもたちが奴隷制反対協会を組織することに疑問を持つ人が誰かいるのでしょうか。すでに、アメリカには禁酒のための、伝道のための、平和のための子ども組織があるのです」と述べ、教会学校に集う年令の子どもたちが、奴隷制反対のために組織を作り活動していくことを期待した。アメリカ奴隷制反対協会の出版責任者、R. G. ウィリアムズも、子ども組織結成の場で「この国のすべての都市、町、村に奴隷制反対協会が作られるように努力しましょう。すべての少年少女をその会員にするよう努力しましょう」と子どもたちに呼びかけた。ニューヨーク市では、チャタム・ストリート・チャペルで子ども奴隷制反対協会が結成されて以来、翌年1837年はじめまでに、五つの子ども組織が存在したことが『奴隷の友だち』から、うかがえる³⁹⁾。

子どもの運動組織は、アポリショニストを親に持つ子どもたちにとっては、精神的支援の場でもあった。チャタム・ストリート・チャペルの子ども奴隷制反対集会の決議事項の中には、「私たちの両親が、アポリショニストであるために、人びとから狂信者とか、扇動する者、国に敵対する者と呼ばれるとき、そのときこそ私たちはもっと両親を愛し、両親をお手本にしていきましょう」という決意が宣言されている⁴⁰⁾。

1830年代後半は、廃止運動組織の数の増加や奴隷制反対文書の出版・配布活動の拡大にともない、アポリショニストに対する暴動や嫌がらせ、集会妨害が激化した時期だった。ニューヨークの店先に「アポリショニストに死を」と刻まれた猟刀が出回ったことも『奴隷の友だち』は報告している。『奴隷の友だち』には、父親がアポリショニストであるために学校で友達にからかわれる少女の話も紹介されている⁴¹⁾。こうした状況の中、アポリショニストの子どもたちにとって、子どもの運動組織の存在は、奴隷のための活動の場であるだけでなく、自分たちにとっての精神的なよりどころもなった。そのような子どもたちに『奴隷の友だち』は、「[奴隷制の廃止を] 主張することによって、あなたたちの大切な家族や友人が侮辱されたり、脅かされたりしています。しかし、私たちは恐れてはなりません⁴²⁾と励ました。

(3) 貯金・献金・節約

チャタム・ストリート・チャペル子ども奴隷制反対協会の規約を見ると、第2条では、子ども組織の目的が次のように規定されている。「奴隷制反対のためにお金を集めること、『奴隷の友だち』を読み、広く配布すること、自由黒人が尊敬され良い待遇を受けるように、そして奴隷が解放されるよう

に全力を尽くすこと。」子ども組織の活動のひとつとして、現金を集め蓄えることは道徳的实践として奨励されている⁴³。

『奴隷の友だち』には、子ども組織の献金についての報告記事がしばしば掲載され、また集められた現金の使い道についても記述されている。ニューヨーク州ホワイツボロの子ども奴隷制反対協会は15ドルをオハイオ州シンシナティにある黒人の学校のために送っている。ロードアイランド州プロヴィデンスの少女たちが寄付した手芸作品の売上金は、奴隷制反対協会の会計に入り、そこで奴隷制反対文書の印刷のために用いられた。チャタム・ストリート・チャペル子ども奴隷制反対協会は、子どもたちからの寄付金を集め、『奴隷の友だち』の第17巻を1000冊購入し、それを無料で配布した。ロードアイランド州ポータケットの子ども奴隷制反対協会は、100ドルをアメリカ奴隷制反対協会に寄付している⁴⁴。

こうして見ると現金は決して、子どもに関わりのない汚いものとしては扱われていない。ただしその現金は道徳的な目的で使われることが求められた。子どもたちが寄付金を集めるという行為は、奴隷制廃止運動の促進につながる、道徳的大義を持った活動だった。

1836年にチャタム・ストリート・チャペルで子ども奴隷制反対協会が結成された際、ルイス・タッパンは子どもたちに「ふたにお金を入れるための細長い切り込みが入った箱」、貯金箱を紹介した。そして、子どもたち一人一人が貯金箱を持ち、これを利用することを勧めた。子どもたちが使った貯金箱には、手首足首を鎖につながれてひざまずく女性奴隷や奴隷船の絵が描かれていたり、また1834年にタッパンの自宅を暴徒が襲った際に破壊された家具の木材を材料としていたり、奴隷制反対のシンボルが可視化されていた。子どもたちは、こうした貯金箱に小銭を入れるたびに、自分の行為が奴隷制の廃止という目的につながることを確認することができた⁴⁵。

奴隷のために貯金し、寄付することを通して、子どもたちは節約や節制、自己犠牲や慈善を学ぶことにもなった。『奴隷の友だち』は、宣教師やその他の伝道団体を支援するため週に1ペニー寄付するイギリスの「週1ペニー協会 penny-a-week society」を紹介し、アメリカにおいても子ども奴隷制反対協会や日曜学校でこのような活動を導入することを奨励している⁴⁶。

『奴隷の友だち』は、キャンディーを買うよりも黒人のために使ってほしいとアメリカ奴隷制反対協会に小銭を持ってきた9歳と5歳の少女についての話や、無駄遣いする前にお金を貯金箱に入れることにしていると語る黒人少年の話に掲載している。貯金箱に入れる小銭は「キャンディー」や「砂糖漬けのプラム」また「おもちゃ」を買うことを我慢し犠牲にしたお金だった。アボリショニストのR・G・ウィリアムズは「合衆国の少年少女たちへ」の中で「甘いお菓子や食べ物、飲み物、着るもの、持ち物のために、必要もないのにあなたのお金を使いたくなったとき、かわいそうな何千人もの奴隷の子どもたちのことを考えなさい」と述べ、「ばかばかしいことのために1セントも使わないようにしなさい。[その1セントを] 奴隷制反対協会の金庫に入れなさい」と忠告した⁴⁷。

(4) 甘いお菓子を我慢する意味

「キャンディー」や「砂糖漬けのすもも」を買うかわりに小銭を貯金する子どもたちにとって、甘

いものを控えることには特別な意味があった。チャタム・ストリート・チャペルの子ども奴隷制反対協会の決意書には「奴隷が作った砂糖や米、その他のものを口にしないようにする」ことが宣言されていた。黒人がなぜ奴隷とされているのか。それは「私たち」のために「砂糖、米、綿花を生産するため」であるとし、奴隷が生産したものを購入したり使用したりすることは、奴隷制の維持に手を貸すことになることとみなしたのである。子どもたちが甘いものを我慢することは、奴隷が作った砂糖や米をボイコットする性格を持った行為でもあった⁴⁸。奴隷が「自由と命とを犠牲にして」砂糖を生産していることを「ほほえみながら幸せそうにお茶をすするアメリカのご婦人たち」に知らせ⁴⁹、値段が高くても奴隷労働によらない商品の消費をすすめることも、子どもたちにできることのひとつとされた。

アボリショニストは、奴隷労働による商品のボイコットを実現するために、1830年代後半に、南部のサトウキビの代替としてビートやバターナッツから砂糖を生産する道を模索していた。作家のリディア・マリア・チャイルドの夫デイビッドも、マサチューセッツで「自由」な砂糖を生産する可能性を求めて、財と労力を研究に費やした。『奴隷の友だち』にも、このような奴隷労働によらない「自由」な砂糖の可能性についての記事が掲載されている⁵⁰。

しかし、「自由」な砂糖の生産や南部の砂糖の完全なボイコットは、実際には難しいことだった。子どもたちが甘いものを我慢することは、むしろ奴隷制に立ち向かうシンボルとして重要な政治的意味を持っていたと言えよう。と同時に、砂糖を我慢するという行為は、子どもたちにとって自分の身体管理の訓練としての意味も含んでいた。

19世紀前半のアメリカでは、身体の適切な管理がより高い精神性を保つことに通じるとする健康管理の風潮が中産階級を中心に広まり、子どもの精神的身体的管理に特別な注意が払われた。当時の育児書や料理の本には、誤った食事は、子どもの抑制されなければならない欲望を刺激すると説き、ケーキ、果物、砂糖菓子を控えることを道徳的資質の育成との関わりで論じていた。アボリショニストは当時のこのような健康に対する考え方に奴隷制反対の意味を加えて、奴隷労働による商品のボイコットを、子どもたちの活動として奨励したと考えられる⁵¹。

暮らし方が道徳的資質に深い関わりがあるとする考え方は、『奴隷の友だち』を通してみることができものである。『奴隷の友だち』は、子どものための奴隷制反対の教育の書であるとともに、次世代を担う子どもたちの人格形成のための教育書としての役割も果たしていた。『奴隷の友だち』は、子どもたちにアボリショニストは「寛大で勤勉で自己犠牲的で勇気がなければなりません」と主張し、「友だちにかんしゃくを起こしたり、自分の思い通りにならないからと言って家でいらいらしたり」「他の誰よりも自分のことを気にかけたりする男の子は、いいアボリショニストにはなれません」と説いた。またアボリショニストに最も必要な資質は「柔和 meekness」、すなわち簡単に腹を立てたり怒りに駆られることがない穏やかな気性であると述べ、感情の制御ができることを重視した⁵²。

『奴隷の友だち』は、奴隷制反対の活動を通して、子どもたちが自制心、自己犠牲、節約、勤勉を身につけ、人格形成することを強く望んだのだった。時間を無駄にしないこと、勤勉に自己向上に努

めることも、しばしば語られた。勤勉、自制、節約などは、産業化が急速に進みつつあった当時の社会の中で成功していくために必要な価値であり、また当時出現しつつあった中産階級の生活のあり方を規定する基準でもあった。ののしりの言葉、嘘、飲酒など自己の衝動の統御ができない行動は、こうした資質の欠如として描かれた。アポリショニストは、禁欲や勤勉それ自体を自己目的化するよりは、こうした資質を身につけた結果の暮らし方や美的感性を重んじた。そしてこのような資質を内面化した結果は、言葉遣い、振る舞い、生活の仕方、さらには身だしなみに表れると考えた。

『奴隷の友だち』は奴隷制について語る場であるとともに、中産階級的な価値や美的感性、生活の仕方を定義し、それを子どもたちに継承する場でもあった。奴隷制廃止運動の担い手が中産階級であったかどうかは研究史上議論になるところであるが、重要なことは奴隷制廃止運動は中産階級的な「価値」を伝えようとし、その文脈の中で「自由」な市民に必要な道徳的文化的資質を規定し、さらには、その文脈の中で奴隷制の廃止を展望していたということである。

おわりに——「解放された家族」

『奴隷の友だち』には「解放された家族」⁵³と題した絵とそれを説明する物語が掲載されている。この物語を通して、アポリショニストが描いた解放の展望をかいま見ることができる。この絵は、解放された奴隷の家族の様子を描いたもので、部屋のいすに座って聖書を読んでいる父親の傍らに、小さな子どもを腕に抱いた母親と二人の男の子の姿が描かれている。この絵の説明文は、奴隷解放の暁には「解放された家族に聖書協会 (the Bible Society) が聖書を配布する」ことになると述べ、そのときは父親が聖書を「妻や子どもたちに」読んで聞かせ、また読み方を教えると語る。家族の回復は父親の家長としての役割の回復として描かれる。母親はもはや野良に出て働かず、小さな子どもたちを一日放置しないで済むようになり、当時の社会において「女性の領域」とみなされていた「家庭にとどまって」子どもたちの世話をすることができる。と、このように語られるのである。

アポリショニストにとって、奴隷の解放とはこのような黒人の家庭の実現をも意味していた。そのために自己の身体に対する所有権の回復、自己の労働に対する所有権の回復、道徳的、知的、社会的向上の手段としての教育の権利の回復が求められた。アポリショニストは、教育による規律の内面化と自己向上を、奴隷の身体的拘束からの解放とセットで展望していた。奴隷制からの自由とは、聖書を読む自由に象徴される、道徳的に向上する機会を手にすることだった。自制心、節約、勤勉といった規範を内面化し、その結果が「きちんとした」暮らしぶりや身だしなみに現れることにより、黒人に対する人種偏見も解消することを期待したのである。

『奴隷の友だち』を通して、アポリショニストは、子どもたちに奴隷制についての教育を行った。と同時に、この雑誌からは、産業化が進むアメリカの中で市民に必要とされる資質や価値を明確化し、子どもたちにそうした資質を身につけることを求めるアポリショニストの姿勢も映し出された。身体管理、自己規制、時間の管理などを重んじ、中産階級的な価値を説いたアポリショニストの感性や価値観が、奴隷制廃止後の社会の展望やその限界にどのように関わり合うのかについては今後の課題として考察を続けたい。

注

- (1) Bertram Wyatt-Brown, *Lewis Tappan and the Evangelical War against Slavery* (1969; new edition. Baton Rouge and London: LSU Press, 1997) や Leonard L. Richards, *Gentlemen of Property and Standing: Anti-Abolition Mobs in Jacksonian America* (NY: Oxford University Press, 1970) では、アボリショニストの活動の一環として『奴隷の友だち』出版への言及は見られるが、雑誌の中身については触れられていない。Karen Sanchez-Epper, "Bodily Bonds: The Intersecting Rhetorics of Feminism", in Shirley Samuels ed. *The Culture of Sentiment: Race, Gender, and Sentimentality in 19th Century America* (NY and Oxford: Oxford University Press, 1992) pp. 157-171 および Shirley Samuels, "The Identity of Slavery," in *Ibid.* においてはこの雑誌に掲載されたいくつかの物語が分析の対象として扱われている。
- (2) Ann Scott Macleod, *American Childhood: Essays on Children's Literature of the Nineteenth and Twentieth Centuries* (Athens and London: The University of Georgia Press, 1994) pp. 88-89.
- (3) Henry C. Wright to William L. Garrison, January 24, 1837. quoted in Louis Ruchames ed. *The Abolitionists: A Collection of Their Writings* (New York: Capricorn Books, 1964) p. 110.
- (4) Carolyn L. Karcher, *The First Woman in the Republic: A Cultural Biography of Lydia Maria Child* (Durham and London: Duke University Press, 1994) pp. 151-152.
- (5) 本論文では、この雑誌の分析を North Carolina State University, D. H. Hill Library 所蔵のマイクロフィルムに基づいて行った。
- (6) *Second Annual Report of the American Anti-Slavery Society* (1835), p. 30; Wyatt-Brown, *Lewis Tappan and the Evangelical War against Slavery*, p. 143. この年 *Human Rights*, the *Anti-Slavery Record*, *Emancipator* そして *Slave's Friend* の4種類の雑誌が発行された。
- (7) 奴隷制廃止運動の戦術と即時廃止の思想については、宮井勢都子「奴隷の即時解放を求めて 1830年代のアボリショニストの奴隷制認識」本田創造編『アメリカ社会史の世界』（三省堂 1989年）を参照。
- (8) Karcher, *The First Woman in the Republic*, p. 166.
- (9) Phillip Lapsansky, "Graphic Discord: Abolitionist and Antiabolitionist Images," in Jean F. Yellin and John C. Van Horne, eds. *The Abolitionist Sisterhood: Women's Political Culture in Antebellum America* (Ithaca and London: Cornell University Press, 1994) p. 202.
- (10) 価格については『奴隷の友だち』各号の表紙に印刷されている。
- (11) Richards, *Gentlemen of Property and Standing* pp. 56-62, Wyatt-Brown, *Lewis Tappan and the Evangelical War against Slavery* p. 172.
- (12) "The Poor Innocents," *The Slave's Friend* (以後 *SF* と略), Vol. 1, No. 2 pp. 13-14; "Charles Ball's Mother," *SF*, Vol. 2, No. 4, pp. 11-14.
- (13) "Stolen Children," *SF*, Vol. 1, No. 3, pp. 1-3; "The Poor Mother," *SF*, Vol. 1, No. 3, pp. 3-5; "Zamor and Hinda," *SF*, Vol. 3, No. 10, p. 12; "About the Slave Trade," *SF*, Vol. 1, No. 2, pp. 9-11.
- (14) "Is It Possible?," *SF*, Vol. 1, No. 9, p. 16.
- (15) "Mary French and Susan Easton," *SF*, Vol. 1, No. 11, pp. 1-15.
- (16) "The Story of Dinah" *SF*, Vol. 2, No. 12, pp. 1-3.
- (17) "Poor Little Girl," *SF*, Vol. 3, No. 6, pp. 5-9; "The Deaf, and Dumb, and Blind," *SF*, Vol. 3, No. 2, pp. 3-7.
- (18) Janet Ditsman Cornelius, *When I Can Read My Title Clear: Literacy, Slavery, and Religion in the Antebellum South* (Columbia, South Carolina: University of South Carolina Press, 1991) pp. 32-33.
- (19) "The Tree of Slavery," *SF*, Vol. 3, No. 9.
- (20) *SF*, Vol. 3, No. 2, p. 4.
- (21) Harvey J. Graff, *The Literacy Myth: Cultural Integration and Social Structure in the Nineteenth Century* (1979; new edition. New Brunswick (U. S. A.) and London: Transaction Publishers, 1991) pp. 22-25.
- (22) *SF*, Vol. 3, No. 1, p. 14.
- (23) *SF*, Vol. 2, No. 5, p. 5.

- (24) "The Enslaved Mind," *SF*, Vol. 2, No. 3, pp. 9-10.
- (25) "How Children Become Slaves," *SF*, Vol. 1, No. 2, pp. 5-8.
- (26) "Immediatism," *SF*, Vol. 1, No. 7, p. 13.
- (27) "To Juvenile Anti-Slavery Societies," *SF*, Vol. 3, No. 5, pp. 7-11.
- (28) *SF*, Vol. 3, No. 2, p. 9.
- (29) "What is Slavery!?" *SF*, Vol. 1, No. 4, pp. 4-7.
- (30) "To the Reader," *SF*, Vol. 1, No. 6.
- (31) "Resolutions," *SF*, Vol. 1, No. 7, pp. 4-5.
- (32) *SF*, Vol. 1, No. 4 "Rev. Mr. Martin's Remarks," *SF*, Vol. 2, No. 5, p. 2.
- (33) "The Story of Dinah," *SF*, Vol. 1, No. 12, pp. 1-3; *SF*, Vol. 2, No. 5, p. 11.
- (34) *SF*, Vol. 1, No. 12, p. 3.
- (35) "How Children Become Slaves," *SF*, Vol. 1, No. 2, pp. 5-9.
- (36) *SF*, Vol. 2, No. 7, p. 9.
- (37) "What Can We Do?" *SF*, Vol. 1, No. 3, pp. 8-12.
- (38) "Juvenile Anti-slavery Society," *SF*, Vol. 2, No. 5, pp. 1-16.
- (39) *Ibid.*, p. 4.
- (40) *Ibid.*, p.15.
- (41) *SF*, Vol. 3, No. 11, p. 4-5.
- (42) "Faith," *SF*, Vol. 1 No. 5, pp. 5-7.
- (43) *SF*, Vol. 2, No. 5, pp. 7-8.
- (44) *SF*, Vol. 3, No. 5, p. 3; *SF*, Vol. 2, No. 7, pp. 8-9.
- (45) *SF*, Vol. 2, No. 5, p. 16.
- (46) *SF*, Vol. 3, No. 3, pp. 5-7.
- (47) "Address to the Little Boys and Girls of the United States," *SF*, Vol. 2, No. 5, pp. 10-15.
- (48) *SF*, Vol. 2, No. 5, pp. 1-16.
- (49) "Sugar, and Rice, and Cotton," *SF*, Vol. 2, No. 1, pp. 6-9.
- (50) *SF*, Vol. 2, No. 2, p. 7; "Butternut Sugar," *SF*, Vol. 3 No. 4, pp. 9-10; Karcher, *The First Woman in the Republic*, pp. 241-42, pp. 248-50.
- (51) Harvey Green, *Fit for America: Health, Fitness, Sport and American Society* (1986; Paperback edition. Baltimore and London: Johns Hopkins University Press, 1988) pp. 47, 52; Jayme A. Sokolow, *Eros and Modernization: Sylvester Graham, Health Reform, and the Origins of Victorian Sexuality in America*, (London and Toronto: Associated University Press, 1983) pp. 12, 149-150.
- (52) "The Boys We Want," *SF*, Vol. 2, No. 4, pp. 6-8.
- (53) "The Emancipated Family," *SF*, Vol. 2, No. 8, pp. 1-3.